

学位論文題名

Personality and psychiatric feature of young adults with depression and suicidality

(自殺とうつ病に関連する気質-性格特性および精神医学的特徴に関する研究)

学位論文内容の要旨

【背景と目的】自殺予防は現在の日本における重要な社会的課題であり、20代～30代の若年成人期の自殺率に上昇傾向が見られている。また自殺関連行動は、10代後半から20代前半の年代において発生し始めるため、この年代における自殺傾向と関連のある因子を研究することは自殺予防を行う上で重要と考えられる。しかし現在までに自殺者数の減少はみられておらず、また自殺の予測因子に関する前方視的研究においても自殺を予測することが困難であることが報告されている。

本研究では自殺と関連のある精神疾患であるうつ病を主な対象とし、自殺と関連のある精神医学的要因、心理学的要因、神経心理学的要因、QOLを包括的に調査した。また、自殺およびうつ病と関連のある気質-性格特性について、大学生を対象に研究した。

第一章

【対象と方法】18歳から24歳の大学生を対象に精神疾患簡易面接法 (Mini-International Neuropsychiatric Interview; M. I. N. I) による構造化面接を行い、大うつ病エピソードに該当する症例を対象とした。M. I. N. Iの第4項目である“自殺の危険”が中等度以上の症例を自殺念慮群、中等度未満の症例をうつ病群とした。健常群は別に募集し、M. I. N. I. screenにて精神疾患がないことを確認した。評価項目は Beck Depression Inventory 2nd edition (BDI-II), Beck Hopelessness Scale (BHS), Rosenberg's Self Esteem scale (RSES), Trail making test (TMT), Medical Outcome Study 36-Item Short-Form Health Survey version 2 (SF36v2) 等である。一元配置分散分析および事後検定により群間比較を行った。うつ病群と自殺念慮群で有意差が認められた項目を独立変数として、ロジスティック回帰分析を行った。有意水準は5%とした。

【結果】各群15例の症例がエントリーし、背景因子に有意差はなかった。うつ病の重症度を表す BDI-II は、うつ病群と自殺念慮群で有意差はなく、将来に対する絶望感の評価尺度である BHS についても有意差はなかった。うつ病群と自殺念慮群で有意差が認められた項目は自尊感情の評価尺度である RSES と SF36v2 の下位尺度である社会機能 (Social Functioning, SF) のみであった。TMT 等の神経心理学的検査には有意差はなかった。RSES と SF を独立変数としたロジスティック回帰分析を実施したところ RSES は自殺念慮群で 0.832 倍の低値であった。

【考察】ほぼ同等の重症度の大うつ病エピソードに該当する症例において、自尊感情の低下が自殺の危険に関連していることが示唆された。また、自殺念慮群で SF が低値であった

ため、自殺念慮の背景に社会的孤立が影響する可能性も考えられた。

第二章

【対象と方法】2010年に北海道大学に入学した大学生2117人のうち、Patient Health Questionnaire (PHQ-9)とTemperament and Character Inventory (TCI)に完全回答した1421人(67.1%)を対象とした。PHQ-9のアルゴリズム診断に基づき大うつ病エピソード群(41人, 2.9%)、その他のうつ病エピソード群(97人, 6.8%)、非うつ病コントロール群(1283人, 90.3%)の三群に分類した。三群間のTCIの値を二元配置分散分析により比較した。また、Character profileに基づく分析も行った。有意水準を0.1%とした。

【結果】大うつ病エピソード群は健常群に比較して、Harm Avoidance (HA)が有意に高く、Self-directedness (SD)、Cooperativeness (C)、Self-transcendence (ST)は有意に低値であった。その他のうつ病エピソード群は健常群に比較して、HAが有意に高く、SDが有意に低値であった。SDおよびCが高い組み合わせになるに従い、うつ病エピソードの発生率は低下する傾向($\chi^2_{\text{trend}}=57.2, P<0.0001$)が認められた。同様に自殺念慮の発生率についても、SDおよびCが高い組み合わせになるに従い低下する傾向($\chi^2_{\text{trend}}=49.3, P<0.0001$)が認められた。

【考察】HA高値およびSD低値がうつ病エピソードに共通した特徴であった。また、性格特性に関して、SDおよびCの組み合わせがうつ病および自殺念慮の発生に関連していると考えられた。

第三章

【対象と方法】対象は1999年から2002年、2004年から2007年までに北海道大学に入学した20,919人の学生のうち入学時にTCIを完全回答した16,343人(78.1%)とした。この母集団のうち、2011年3月までに20例(男性18例、女性2例)の自殺が確認され、本研究の解析対象とした。年齢、性差、時代背景、学部環境等の影響を考慮し、年齢、性別、入学年次、所属学部が一致した対照を症例毎に3例づつ無作為に抽出し、症例対照研究を実施した。まずTCI scoreの群間比較をt検定により行い、男性例のみについてTCI subscaleの解析を実施した。t検定により有意差が認められた項目を抽出して、ロジスティック回帰分析を実施した。有意水準は5%とした。

【結果】TCI scoreの解析では、HAのみが有意に高値($P=0.034$)であった。subscaleではHA1 (Anticipatory worry, $P=0.007$)およびHA2 (Fear of uncertainty, $P=0.036$)が有意に高値であった。また、ST3 (Spiritual acceptance, $P=0.038$)は有意に低値を示していた。HA1とST3を独立変数としたロジスティック回帰分析(変数減少法)を実施したところ、HA1のみが有意に高値であった(OR = 1.32, $P=0.01$, 95%CI, 1.06-1.63)。

【考察】本研究の結果、自殺既遂者の気質-性格特性として、HA高値が確認された。これまでに自殺既遂者のTCIを報告した先行研究はないが、自殺企図者を対象とした先行研究と一致する結果であった。HA高値はうつ病等の精神疾患との関連も報告されており、本研究の対象者も何らかの精神疾患のリスクがあった可能性がある。ST3低値も注目すべき特徴と考えられるが今後さらに研究する必要がある。

【結論】第一章と第二章の研究の結果から、うつ病に伴う自殺念慮に関連する最も顕著な特徴は自尊感情や自己志向等の自己の認識に関する側面であった。さらにTCIのCやSF36v2の社会機能によって評価される他者との関係の機能不全が重畳することにより、自殺念慮が発生しやすくなるものと考えられた。さらに本研究の最も重要な結果は第三章において自殺既遂者のHA高値を確認したことである。また自殺既遂者の性格特性として、SDやCの低下がみられず、ST3が低い傾向がみられ、これは自殺既遂者に特徴的な傾向なのかもしれない。しかし、この点はさらに症例を蓄積して研究する必要がある。

学位論文審査の要旨

主査	教授	武藏	学
副査	教授	久住	一郎
副査	教授	吉岡	充弘
副査	准教授	矢部	一郎

学位論文題名

Personality and psychiatric feature of young adults with depression and suicidality

(自殺とうつ病に関連する気質-性格特性および精神医学的特徴に関する研究)

自殺関連事象は青年期に増加し、また自殺は多要因により発生する。そのため本研究では、まず青年期を対象に自殺に関連する要因を探索的に検討した。大うつ病エピソードと診断された被験者を対象に、うつ病の重症度、絶望感、自尊感情、認知機能、QOL等と自殺念慮との関連を検討した。その結果、自尊感情が自殺念慮を伴ううつ病患者において有意に低下していることが確認された。自尊感情は人格の一側面を形成すると考えられることから、次に大規模な集団を対象にうつ病エピソードおよび自殺念慮と気質-性格特性の関連を調査し、分析した。調査には Temperament and Character Inventory (TCI) と Patient Health Questionnaire (PHQ-9) を用いた。TCI は人格特性を気質と性格に分けて評価する評価尺度であり、気質は新規性追求 (NS)、損害回避 (HA)、報酬依存 (RD)、固執 (P) の 4 次元、性格は自己志向 (SD)、協調 (C)、自己超越 (ST) の 3 次元で評価される。PHQ-9 により大うつ病エピソードおよびその他のうつ病エピソードに分類された群は、HA が有意に高く、SD が有意に低い傾向が認められた。また、SD および C が高い組み合わせになるに従い、うつ病エピソードの発生率は低下する傾向が認められ、自殺念慮の発生率についても、SD および C が高い組み合わせになるに従い低下する傾向が認められた。最後に、自殺既遂者の TCI に関する検討を行った。対象は北海道大学入学時に TCI を実施した学生のうち、自殺既遂に至った 20 例とした。年齢・性別・所属学部・入学年次が一致した 60 例を対照群として、TCI の結果を単変量解析により比較したところ、HA が有意に高値であった。サブカテゴリの解析では、HA1 (予期不安)、HA2 (不確実性への恐れ) が有意に高値、ST3 (霊的経験の受容) が有意に低値であった。HA1 と ST3 を独立変数としたロジスティック回帰分析を実施したところ、HA1 において有意に高値が確認された。以上から自殺既遂者の気質としては HA 高値が特徴的であることが確認された。

質疑応答では、矢部一郎准教授から自殺既遂者を対象とした場合の臨床研究の限界について質問があり、申請者は自殺前の精神医学的診断が明らかではない点を挙げた。本研究でも自殺既遂者の診断は、5 例しか確認できず、受診歴を確認できない事例もあることを説明した。また、HA はどのような気質かという質問があり、行動の抑制に関わる気質である

ことを説明した。さらに評価尺度の妥当性に関する質問を受け、今回使用した評価尺度は妥当性が確認されているものを使用しており、精神症状の評価尺度は他の評価尺度との比較等により妥当性が確認されることも説明した。また、今後の展望について、対象を一般化して他の年代の自殺者の特徴を調査する方向と、気質と幼少期ストレスや遺伝的要因との関連を調査する方向があることを述べた。吉岡充弘教授からは、TCI 実施から自殺既遂までの期間があり、その間に変化する可能性がないかとの質問があった。年齢に伴い性格に関しては成熟する傾向が確認されているが、パーソナリティは一般に環境に対する一貫した反応を規定するため、短期間の大きな変化は想定されないことを説明した。また、STの意味について質問があり、STは自然との一体感等の社会性を超えた部分に係る評価に関するものであり、STが低い個人は現実的、決定論的、懐疑的な傾向があることを説明した。久住一郎教授からは、自殺既遂者のパーソナリティ研究の先行研究にはどのようなものがあるかという質問があり、NEO-PI やベック絶望感尺度を使用したものがあるが、TCIを用いたものは本研究がはじめてであることを説明した。また、自殺既遂者に特異的な特徴について、HAが高値かつSDが低値ではないことが挙げられるのではないかという指摘を受け、本研究の結果を総合すると確かにそのように考えられることを説明した。武蔵学教授からは、自尊感情の自己受容的な側面の重要性が指摘され、それを高めるにはどのような取り組みが可能かという質問があった。それに対して、申請者は、自尊感情には自己を good enough と捉える面があることを認識するように促すことが大切であると考えられることを説明した。

この論文は、自殺とうつ病に関連する要因を人格特性の観点から検証した臨床研究の論文として高く評価される。今後、さらに研究を継続することにより、自殺とうつ病に関連する要因を明らかにし、さらに自殺予防などの臨床応用に資することが期待される。

審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。